

中国朝鮮族の日本の過去(1910～45年)に対する認識

——来日前後の変化に着目して——

堤一直 （大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター）

キーワード：朝鮮族、日本の過去に対する認識、
来日前後の変化、少数民族

はじめに

東アジア諸国において、日本の過去に対する認識をめぐる議論は依然として大きな問題となっている。例えば、政府間においては、日韓歴史共同研究が2002年から2010年までに2回、日中歴史共同研究は2006年から2009年にかけて1回実施されている。そして、政府間のみならず市民間においても歴史認識問題は葛藤を引き起こしてきた。2011年末、中国では南京事件を描いた映画「金陵十三釵」が公開され、2012年5月にはソウルに従軍慰安婦記念館が開館した。日本の敗戦から70年近く経過した現在においても、日本の過去を巡る問題は、日本、朝鮮半島、中国を含む、東アジアの国際関係に大きな影響を与えていると言える。以上のような問題意識の下、本論文では中国朝鮮族の歴史認識に着目する。中国朝鮮族は19世紀半ばより中国東北部に本格的な移住を開始したが、日韓併合を契機としても多くが移住した。さらに、1932年に「満州国（以下、煩雑さを避けるため「」を外す）」が建国され、日本の傀儡政権の支配にも服してきた。彼らの移住とその後の中国東北部での生活に日本が大きな影響を及ぼしたことは事実である。ゆえに、朝鮮族の日本の過去に対する認識を問うことには意義がある。そして、本論文では中国朝鮮族の中でも、「1945年以前の日本の過去を経験しておらず（1945年以降に生まれた者）」、かつ「日本に定住している者」を

対象とする。

このような属性を持つ朝鮮族を研究対象とした理由を以下に述べる。まず、朝鮮族の日本の過去に対する認識を選択したのは、姜龍範が述べるように、先行研究が少ないからである⁽¹⁾。さらに、それら少ない先行研究は中国、韓国で行われたものであり、日本の過去に対して否定的な認識を持つ者の例が取り上げられているというのが、両国に共通した特徴である。また、韓国の研究者は金学鉄、李根全といった著名な朝鮮族作家に注目している。具体的には、作家達が、1945年以前を題材とした作品を描く際に、中国共産党のイデオロギーに配慮しながらも民族性を表出しようと試みたと述べているのである。だが、中韓の先行研究を概観して言うことは「朝鮮族の個人」に注目して、「日本の過去に対して否定的でない認識」まで含めて論じたものが少ない、ということである。

次に、1945年以降に生まれた者を中心とした理由について述べる。「彼らが現在、歴史認識問題の当事者となっているということ」ならびに「歴史認識がどのように継承されているか観察する必要があるということ」の二つが理由である。一番目に関しては、冒頭で述べたように、日本の過去に対する議論が依然として続いているならば、当時を生きていない者の認識や意見もそれに影響を与えており、看過できないということである。二番目に関しては少数民族の歴史認識の継承が注目されているからである。これに関する研究としてはネイティヴ・アメリカンが主に取り上げられているが、同じ様に多民族国家の少数民族である朝鮮族の歴史認識の承継も

(1) 姜龍範「中国朝鮮族の視点から見た日本の歴史教科書改訂問題」『関西大学人権問題研究室紀要』62号、2011年、9～10ページ。

注目に値すると考えられる。そして、「日本に定住している者」に着目した理由としては、留学生の日本観が、日本移住によって、どのように変化したかを取り上げた李正連の研究を参考にしている⁽²⁾。認識や価値観は不変ではなく、移住によっても変化しうる。ゆえに、「日本に定住している者」を対象とした。

加えて、研究方法に関しては、資料・史料調査ならびにインタビュー調査を実施した。資料には在日朝鮮族が運営しているHP等も含まれる。インタビューの調査に関しては「3」で詳細に述べる。なお、「認識」とは、被験者の思いや考えを意味しており、集団的記憶等のみを指すわけではない、広義の概念である。

1. 先行研究

ここでは、本論文に関係する先行研究を概観していく⁽³⁾。まず、研究対象である中国朝鮮族の歴史認識に関して、いかなる研究が蓄積されているか流れを追っていく。続いて、その背景として、日本の過去に関する歴史認識に対していかなる先行研究があるのかを確認していく。最後に、本論文は少数民族の歴史認識を問うので、それに関するものも紹介する。

(1) 朝鮮族の日本の過去に対する認識

① 中国

中国朝鮮族青年学会は、日本の過去を直接経験した朝鮮族を対象に彼らの移住・定着の過程についてインタビュー調査を行っている。計64名というインタビュー調査被験者の多さ、かつ被験者の出身地が慶尚道、全羅道、忠清道、京畿道、江原道、黄海道、平安道、咸鏡道と朝鮮

半島のほぼ全ての地域を網羅している点が注目される。インタビュー調査で得られた日本の支配についての言説には、一貫して極めて否定的なものが多い。朝鮮半島での搾取（「朝鮮から高価な宝をたくさん強奪…」）、それを原因とした満州国への移住とその後の苦境（「日本の軍隊が徴兵…」）が、具体的に述べられている⁽⁴⁾。

次に、戸田によれば、延辺大学の朴昌昱（パク・チャンウク）は、満州国時代の抗日独立運動において、朝鮮族は朝鮮民族のためだけではなく、中国の解放という二つの目的のために戦ったという説を主張、同説は中国歴史学界の主流説になった。「中国東北各地で活発に行われた朝鮮人抗日運動を中国史の中に書き加えることができるか否かは、朝鮮族の主体性にも関わる重大問題」と戸田は朴の業績を評価している⁽⁵⁾。

これらの先行研究では朝鮮族は侵略・支配を受けた被害者とされており、日本の過去に対しても否定的な認識があげられている。しかし、崔峰龍のように、朝鮮族がただ侵略・支配の被害者だったのではなく、親日的な側面もあったと指摘している研究もある。崔は、当時を経験した個人への聞き取りからではなく、植民地朝鮮や満州国の新聞、在満朝鮮人団体の声明等から、在満朝鮮人が日本の支配に協力していた面も否定できないと述べている。また親日派の存在を語ることは、朝鮮族間の分裂を招くおそれがあったとも付け加えているのである⁽⁶⁾。また、学術論文ではないが随筆において、否定的だけではない朝鮮族の認識も確認することができる。例えば、金虎雄は、満州国時代に「荒城の月」を耳にして、日本人の人間性に触れたこと、そしてその歌の歌詞を所持していたために文革時代に迫害を受けたことを綴っているのである⁽⁷⁾。中国において、日本の過去に対する

(2) 李正連「日本留学と歴史認識の変容--ライフヒストリーを通して（日本教育学会69回大会報告）--」（東アジアの教育--その歴史と現在）『日本教育学会大会研究発表要項』78(1)号、2010年、54ページ。

(3) 先行研究の筆者の中でコリアン系の者に関しては、同姓が多いので、姓名共に表記することとした。

(4) 中国朝鮮族青年学会編（館野哲、武村みやこ、中西晴代、蜂須賀光彦訳）『聞き書き中国朝鮮族生活誌』社会評論社、1998年。

(5) 戸田郁子『中国朝鮮族を生きる：旧満州の記憶』岩波書店、2011年。

(6) 崔峰龍「기억과 해석의 의미: ‘만주국’과 조선족 (記憶と解釈の意味: 満州国と朝鮮族)」『만주연구 (満州研究)』Vol.2、2005年、97～112ページ。

(7) 金虎雄（権香淑訳）『美しい歌は歳月の丘を越えて』2012年、2012年3月28日権香淑氏より落手。

否定的でない認識や、親日の過去について触れることは敏感なことであると考えられるだけに、崔の研究や金虎雄の随筆は注目に値するのである。

②韓国における先行研究

一番目に김은영(キム・ウニョン)は、1970年代後半以降に書かれた四編の長編叙事詩から、朝鮮族文学には「こうであった過去」としての「朝鮮族の中国東北部への移住過程」、「移住後の封建領主や満州国政府への抵抗運動」と、「こうあるべきであった過去」としての「朝鮮族の風習・生活様式への郷愁」といった三つの側面が存在すると述べている。そして、「朝鮮族の風習・生活様式への郷愁」において作家達が中国共産党の社会主義イデオロギーを尊重しつつも、民族性を文章の中に込めたと述べているのである。日本の過去については、「朝鮮族の中国東北部への移住過程」ならびに「移住後の封建領主や満州国政府への抵抗運動」という二つの部分において主に触れられているが、在満朝鮮人の悲惨な生活ぶりが小説の中に描かれていると、キム・ウニョンは指摘している⁽⁸⁾。

二番目に, 김학명(キム・ハンミョン)は김창걸(キム・チャンゴル)の小説に、「満州国の支配に抵抗しつつも、朝鮮人の中でのエリートとして日本の天皇制の中に取り込まれてしまった」という植民地ファシズムが表現されていると指摘している。ただし、キム・ハンミョンは、このように1930年代後半以降日本に協力した在満朝鮮人エリートはごく少数であったとも述べている⁽⁹⁾。

三番目に최병우(チェ・ビョンウ)は리근전(リー・ゲンジョン)の小説『虎岩』、『苦難の年代』を比較している。共に抗日独立運動が主要な題

材とされている小説である。チェは、1962年の『虎岩』では抗日闘争における朝鮮人と中国人の協力が中心的に描かれていたが、1984年の『苦難の年代』では抗日闘争を中心としながらも、中国人地主との軋轢や朝鮮族の文化についての描写が加えられている点に注目している⁽¹⁰⁾。

四番目に, 차희정(チャ・ヒジョン)は1945年から1949年に延辺日報に連載された小説を取り上げ、日本語が下手なことまで馬鹿にされ卑屈に生きてきた工場労働者が満州国崩壊以降に模範的な技能工となるべく努力を続ける姿を紹介している。そして、そこには「中国共産党の社会主義イデオロギーの下で主体性を回復した朝鮮族」という朝鮮族作家達が選択した小説執筆の方向性が見受けられると述べている⁽¹¹⁾。

韓国における先行研究は朝鮮族の文学作品を通じて、日本の過去に対する彼らの認識を明らかにしようとしている。植民地朝鮮や満州国における朝鮮人の境遇は悲惨なものとして描かれていると分析した部分は、中国における先行研究とも共通している。ただし、彼ら朝鮮族作家が共産党の思想理念を尊重しながらも民族文化を表出させようと試みていると主張している点は、韓国の先行研究の独自性であると思われる。

③日本における先行研究

日本では、金明姫、小林英夫、戸田郁子、権香淑の研究があげられる。

金明姫は在日朝鮮族の生活と意識について、就学生、留学生、社会人と幅広い層に対するアンケート調査を実施している。日本の過去について触れた部分は多くないが、学歴が大学以上の被験者の中で、来日前に「侵略戦争をした日本人」という悪い印象を持っていたが来日後には

(8) 김은영(キム・ウニョン)「중국 조선족 장편서사시에 나타난 역사적 체험의 특성(中国朝鮮族長編叙事詩に現れた歴史的体験の特性)」『한중인문학연구(韓中人文科学研究)』19号、2006年、213～236ページ。

(9) 김학명(キム・ハンミョン)「재만작가 김창걸 소설에 나타난 ‘식민지 파시즘’ (在満作家キム・チャンゴル小説に現れた‘植民地ファシズム)」『한국현대문학연구(韓中現代文学研究)』22号、2007年、201～229ページ。

(10) 최병우(チェ・ビョンウ)「<고난의 년대>의 탈식민주의적 연구(『苦難の年代』의 脱植民地主義研究)」『한중인문학연구(韓中人文科学研究)』18号、2006年、33～51ページ。

(11) 차희정(チャ・ヒジョン)「해방기 『연변일보』소재 재중 조선인 소설 연구(『解放期『延辺日報』素材在中朝鮮人小説研究)」『한중인문학연구(韓中人文科学研究)』20号、2007年、117～143ページ。

「親切的日本人」というように印象が変化した者が多かったと述べている⁽¹²⁾。

小林は検閲文書を基に、在満朝鮮人の認識を明らかにしている。朝鮮半島と変わらない生活苦、差別によって満州への期待が失望に変わる姿が描かれている。また、朝鮮人パルチザンを討伐する部隊で戦ったり、従軍慰安婦として徴用されたりした者の苦悩も読みとることができる。さらに、満州人を労働者として使用したり、華北での出来事ではあるが中国人と対立したりといった朝鮮半島では見られない日本人以外の異民族との関係も描かれている⁽¹³⁾。

戸田は、学術的な分析ではないが、満州国時代における多様な朝鮮人の生き方に注目している。日本に留学した者、満州国崩壊後に恨みを買って殺害された者、さらには生き延びるためにある時は日本軍の守備隊に、またある時は抗日独立軍にも加わっていた者、といった例があげられている。それらの当事者あるいは遺族が日本への愛情・懐古・憎悪を語っているのである⁽¹⁴⁾。

権香叔は、朝鮮族の移住に影響を与えた要因に注目している。国際情勢の変動、あるいは社会的地位の上昇のためなら移住を厭わないといった民族性による場合を「事実的な移動」、一方、個人の動機によるものを「身体的な移動」と分類している。「身体的な移動」は個人の経験や認識の変化（日本の過去に対するそれも含めて）を契機とするもので、「事実的な移動」と相まって朝鮮族の移住に影響を与えたと考えられている。権は「身体的な移動」の例として一人の在日朝鮮族男性の例もあげている。韓国人との出会いを通じて、中国で自身が特殊な存在であることに気付いたその男性は、日本への移住を決意、来日した。しかし、日本の敗戦時に祖父が自決した

という事実が忘れられず、日本国籍取得を躊躇した。個人の経験や認識が、移住に影響を与えているという例があげられているのである⁽¹⁵⁾。

(2)日本の過去に対する個人の歴史認識に関するもの

日本の過去に関しては、歴史教科書問題や靖国神社参拝問題等を巡って、学界、メディアで頻繁に議論されている。しかしながら、個人の認識に焦点を当てたものは決して多くはない。以下、日本の歴史問題に関する個人の認識を取りあげた主な研究をあげる。

一番目に、大里は、中国人の日本の歴史問題への取り組みに注目している。日本の力を借りようとした孫文や、漢奸と呼ばれた中国人の対日行為は、当時の状況を考えればやむを得ない選択だったという説を中国の学界で唱える歴史学者の例を紹介している。また、日本でバイト等をしながらも日本人の歴史認識を見つめた中国人留学生の例も紹介している。日本人は過去、日本が侵略行為を行ったことを分かっているが、意識が弱い、あるいはあえて意識しようとしていないので、中国人は性急に中国の立場・主張を押し付けてはならないというのが、その留学生が辿りついた結論である。大里は、これらから中国人の歴史認識には柔軟な面があると述べているのである⁽¹⁶⁾。

二番目に、道上は、中国の若年層、知識人、メディアの日本認識を取り上げ、複数の知識人と直接対話している。そして、彼らが日本の多様な面を客観的に捉えていると評価している。一方で、日本人には中国の欠点を知ることによって自国の優越を確認し、安心するという心理が存在し、中国の一面しか報道しない日本のメディアが、そのような傾向を助長していると批判している。また、興味深いのは、中国の若年層の中に、学校の歴史教育

(12) 金明姫「日本における中国朝鮮族の生活と意識—在日中国朝鮮族就学生・留学生・社会人を事例として」『人間科学研究』11 (2)号、2004年、65～93ページ。

(13) 小林英夫『〈満州〉の歴史』講談社、2008年。

(14) 前掲脚注5。

(15) 権香叔「朝鮮族の移動と東北アジアの地域的ダイナミズム—エスニック・アイデンティティの逆説」『北東アジア研究』20号、2011年、31～50ページ。

(16) 大里浩秋「中国人の歴史認識」『神奈川大学評論』52号、2005年、43～50ページ。

で日本に対して悪印象を抱くが、その後の他者の語り、日本文化、日本人に触れることで、そのような悪印象が好転したという者の存在を指摘した点である⁽¹⁷⁾。

三番目に、李正連は、韓国人である自らの日本留学経験を基に、来日前後における日本観の変遷を紹介している。李は、自身の日本観を三つに区分している。即ち、良くも悪しくも日本に対する偏った見方しかできない（来日前）、韓国に比べて日本は全ての面において優れて見える（来日直後）、来日してから一定期間経過し、日韓両国の長所、短所を客観的に見るができるようになる（来日後一定期間経過）という時期区分である。そして、この三区分を東アジアから日本に留学した学生に当てはめ、彼らの生活史調査を現在進めている⁽¹⁸⁾。

(3) 少数民族の歴史認識に関するもの

少数民族の歴史認識に関する先行研究が主に蓄積されているのは、ネイティヴ・アメリカンに関するものである。17世紀の前半からネイティヴ・アメリカンと白人の衝突が始まり、19世紀には戦争や強制移住で多くの者が命を落としている。先行研究として代表的なものをあげるならば、Whitbeckは過去の歴史が現在のネイティヴ・アメリカンにも影響を及ぼしているということを、“Historical loss”を測定するアンケート調査で実証した。具体的には、土地や文化を失ったという“Historical loss”をどのくらいの頻度で思い浮かべるのか測定し、またそれらが怒り、逃避、不安、抑鬱などの心理的症状を招来していると結論付けているのである。Whitbeckは、ネイティヴ・アメリカンにとって「ホロコースト」は未だに終わっていないと指摘しているのである⁽¹⁹⁾。

一方、Jervisは、二つのネイティヴ・アメリカ

ンの部族を対象にしたアンケート調査を実施している。現在のネイティヴ・アメリカンの歴史認識は、祖先がどのような境遇にあったか、あるいは現在どのような教育を受けているかによって異なると述べ、ネイティヴ・アメリカンの歴史認識を画一化している説に反論している⁽²⁰⁾。

少数民族であるネイティヴ・アメリカンの歴史認識に関する先行研究からは、歴史が少数民族の現在に影響を及ぼしているということ、またその影響を及ぼす過程において、学校教育や、歴史を経験した当事者の境遇が重要な要素となっているということが伺える。

2. 概要—朝鮮族の歴史—

続いて、朝鮮族の歴史を概観しておきたい。朝鮮人が大量に中国東北部に移住していったのは1860年代以降から中国建国までである。この期間と、日本が朝鮮半島から中国東北部へと勢力を拡張、日中戦争に突入、そして敗戦に至った期間とはほぼ一致する。朝鮮族の移住に日本は大きな影響を与えた。清朝、中華民国、奉天軍閥、中国共産党、中国国民党といった中国の政治主体の影響も看過できないが、中国東北部において日本はそれらの勢力を駆逐していったのである。

特に、朝鮮半島が植民地化されて以降、日本の支配は朝鮮人の中国東北部移住に大きな影響を与えた。抗日独立運動のため、あるいは日本の移住政策によって多くの朝鮮人が中国東北部へと移住していった。また、朝鮮半島が植民地化される以前に中国東北部に移住していた朝鮮人にも、満州国建国を経て、日本の支配は強力に及ぶようになっていった。そして、日本の敗戦後は、中国で内戦、大躍進、文化大革命といった苦難を乗り越えて、改革開放を迎えたのである。以降、中韓

(17) 道上尚史『外交官が見た「中国人の対日観」』文芸春秋、2010年。

(18) 前掲脚注2。

(19) Whitbeck LB, Adams GW, Hoyt DR, Chen X, Conceptualizing and measuring historical trauma among American Indian people, *Am J Community Psychol*, Vol.33 (3-4), 2004, pp.119～30.

(20) Lori L. Jervis, Janette Beals, Calvin D. Croy, Suzell A. Klein, Spero M. Manson and AI-SUPERPPF Team, Historical Consciousness Among Two American Indian Tribes, *American Behavioral Scientist*, Vol.50, 2006, pp.526～549.

交回復が契機となり、朝鮮族は再び大規模な海外移住期を迎えていると言える。

【表1 朝鮮族の歴史(概要)】⁽²¹⁾

1860年代	朝鮮半島北部で大飢饉が発生、朝鮮人が中国東北部の間島に越境、流入する。
1885年	清が朝鮮人の越境を禁じていた封禁令を全廃する。
1894～95年	日清戦争。日本は朝鮮半島における清の勢力を駆逐する。
1902年	大韓帝国が李範允(リー・ボミン)を間島管理使とし、朝鮮人移民を保護する。
1904～05年	日露戦争。日本は中国東北部に勢力圏を拡大。
1910年	日韓併合。
1912年	清朝崩壊、中華民国が建国される。
1916年	張作霖が奉天省の省長に就任する。
1919年	朝鮮のソウルで三・一独立運動が起きる。間島の龍井でも呼応し、デモが起きる。
1925年	朝鮮総督府と奉天軍閥が三矢協定を結ぶ。朝鮮人に対する弾圧が強化される。
1928年	張作霖、閔東軍により爆殺される。中国共産党が朝鮮人を中国の少数民族と認め、革命後には自治権を与えることを方針として確立する。
1931年	満州事変が勃発、閔東軍、朝鮮駐屯軍が張学良を駆逐する。
1932年	満州国が建国される。
1938～43年	中国東北部への朝鮮人計画移民が行われる。
1945年	日本敗戦、満州国崩壊。
1946～49年	国共内戦。共産党の勝利により、中華人民共和国が建国され、中国共産党が朝鮮人に一律に中国国籍を付与し、中国朝鮮族が誕生する。
1950～53年	朝鮮戦争、多くの朝鮮族将兵が参戦する。
1958～60年	大躍進運動。
1966～76年	文化大革命、朝鮮族は「民族主義者」として弾圧を受ける。
1978年	鄧小平が改革開放路線を打ち出す。
1992年	中韓国交回復。韓国を始め、海外への朝鮮族の大量移住が始まる。

現在、朝鮮族は中国、韓国のみならず、日本、米国、ロシア、さらには欧州、オセアニアにまで移住し、まさにグローバル・ネットワークを形成している。中国の朝鮮族人口数は約220万人に達するが、東北部の中でも特に朝鮮族が多い延辺朝鮮族自治州の維持が困難になると言わ

【図1 中国東北部地図】⁽²²⁾



れている。同自治州には約80万人の朝鮮族が定住しているが、これは戸籍上の数値であり、実際はその半数が他の地域に流出していると推測されているからである⁽²³⁾。韓国では「法的には」在外同胞として認知されており、約40万人が定住している⁽²⁴⁾。日本、アメリカ、ロシアでは政府統計を基に朝鮮族の正確な人数を集計することができないが、日本が約8万人(2012年時点)⁽²⁵⁾、アメリカが約2万人(2005年時点、ただしニューヨークのみ)⁽²⁶⁾、ロシアが約5～8万人(2005年時点)と推測されている⁽²⁷⁾。

(21) 本論文で明示した各種参考文献等も参考に筆者作成。

(22) 朝鮮族ネット「朝鮮族居住地域の概要」<http://www.searchnavi.com/~hp/chosenzoku/area.htm> (2012年6月22日確認)。

(23) 李鋼哲「東北アジアの経済発展とコリアン・ネットワークの役割」『日韓フォーラム例会における講演』、2012年6月10日、東京神谷町にて実施。

(24) 『경향신문(京郷新聞)』2012年1月29日(ネット版「오피니언(オピニオン)」、「들어온 이주민, 나가 있는 이주민(入ってくる移住民、出て行く移住民)」、www.mediaus.co.kr/news/articleView.html?idxno=22842 (2012年4月2日)。

3.分析手法

「1」であげた先行研究では、インタビュー調査、アンケート調査が分析手法として採用されている。本論文では、半構造化面接法（Unstructured Interview）を採用した。同手法は、質問事項をいくつか決めた上で、被験者に答えてもらい、それに質問を加えていくという手法である。ちなみに、インタビュー調査においては、半構造化面接法の他に、構造化面接法（Structured Interview）、非構造化面接法（Non-Structured Interview）という面接法もある。前者はアンケート調査の形式で答えてもらうが、その際に質問し自由回答も得るというものである。回答結果に対しては統計的分析を加えることとなる。また、後者は大きなテーマを決め、被験者が気づいていないような認識の抽出までも目的とするというものである。例えば、特定の課題について議論するシンポジウムには、非構造化手法が活用されていると考えられる。これらに対して本論文で半構造化面接法を用いた理由は、アンケート

調査に近い構造化面接法では認識を深く把握することが困難であり、かつ半構造化面接法がインタビュー調査における代表的な手法とされているからである⁽²⁸⁾。

そして、インタビュー調査における具体的な質問事項は下記の通りである。

「質問1 日本の過去（1910～45年の間の朝鮮半島植民地支配、満州国支配、日中戦争など）に対してどのような認識を持っているか。そのきっかけは何か」

「質問2 来日により、日本の過去に対する認識は変化したか。そのきっかけは何か」

【表2 在日朝鮮族被験者28名の属性】

区分	性別	年齢	日本での現在の身分	出身地	最終学歴	居住地	滞在期間
1	男性	20代前半	専門学校生	延辺自	高校	東北、関東	5年未満
2	男性	20代前半	大学生	延辺自	大学	関西、関東	5年未満
3	女性	20代前半	大学生	延辺自	大学	関西、関東	5年未満
4	女性	20代前半	大学院生	延辺自	大学院	関東	5年未満
5	女性	20代前半	大学院生	吉林省	大学院	関東	5年未満
6	男性	20代前半	大学院生	延辺自	大学院	関東	20年以上
7	男性	20代前半	企業勤務（製造）	延辺自	大学院	関東	5年未満
8	女性	20代前半	大学院生	延辺自	大学	関東	5年未満
9	女性	20代前半	大学生	延辺自	大学	関東	5年未満
10	女性	20代後半	大学院生	延辺自	大学院	関東	5年未満
11	女性	20代後半	専業主婦	吉林省	大学	関東	5年未満
12	男性	20代後半	企業勤務（製造）	延辺自	大学院	関東、四国	5年以上10年未満
13	女性	20代後半	企業勤務（IT）	延辺自	大学院	関東	5年未満
14	男性	20代後半	大学院生	延辺自	大学院	関東	5年未満
15	男性	20代後半	企業勤務（製造）	黒竜江省	大学院	関東	5年以上10年未満
16	女性	20代後半	大学院生	黒竜江省	大学院	東北、関東	5年以上10年未満
17	男性	30代前半	企業勤務（IT）	延辺自	専門学校	関西	10年以上15年未満
18	女性	30代前半	大学院生	延辺自	大学院	関東	5年以上10年未満
19	女性	30代前半	企業勤務（貿易）	延辺自	大学	関東	10年以上15年未満
20	男性	30代前半	大学院生	延辺自	大学院	関東	5年以上10年未満
21	女性	30代前半	主婦・企業勤務（貿易）	延辺自	大学	関東	10年以上15年未満
22	女性	30代後半	企業勤務（特許）	吉林省	大学	関西	10年以上15年未満
23	女性	30代後半	大学院生	遼寧省	大学院	関西	10年以上15年未満
24	男性	30代後半	自営業（医療）	延辺自	大学院	関東	10年以上15年未満
25	男性	30代後半	企業勤務（IT）	延辺自	大学	関東	5年以上10年未満
26	男性	40代前半	自営業（IT）	延辺自	大学	関東	10年以上15年未満
27	女性	40代前半	企業勤務（貿易）	延辺自	大学	関東	5年以上10年未満
28	女性	40代後半	団体勤務	黒竜江省	大学院	関東	10年以上15年未満

（注1）：「延辺自」とは延辺朝鮮族自治州を意味する。

（注2）：「関東」とは東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県を、「関西」とは、京都府、大阪府、兵庫県を意味する。

（注3）：「滞在期間」は、5年を目安とした。

- (25) 笠井信幸「朝鮮族ネットワークの相対化」『3NEW세미나(セミナー) in Tokyo』における講演、2012年3月31日、東京赤坂にて実施。
- (26) 李愛娥娥「ロシア沿海州地域における中国朝鮮族の現状」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所、2007年、267～274ページ、273～274ページ。
- (27) 白銀珠「ニューヨークにおける中国朝鮮族」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所、2007年、275～286ページ、276～277、282～283ページ。
- (28) 加藤千恵子・喜岡恵子・渋谷英雄・杉本富利・田中暢子・田村三智子・鳥谷部達『失敗しない社会調査法のすべて』インデックス出版、2010年、147ページ。

調査の進捗について述べるならば、現時点(2012年1月18日～6月22日)までのインタビュー済み被験者数は28名であり、目標被験者数は50名である。被験者は、人間関係の繋がりを通じて、芋づる式に被験者を探すという機縁法によって獲得した。会話は基本的に日本語を用いたが、日本語が堪能でない被験者に対しては韓国語、日本語・韓国語が堪能でない被験者に対しては英語も用いた。被験者の経歴を聞きとるという極めて敏感な作業が含まれるため、個人情報保護を徹底し、年齢、中国での出身地、日本での滞在地や滞在期間の詳細は公表していない。また、聴き取り内容は清書して被験者本人の確認を得ている。

4.事例紹介

被験者数が半数以上に及んだ時点で、4名の被験者の事例を紹介する。28名の中でこれら4名を選定した際の基準について述べたい。一番目に、各世代から抽出したということである。20代1名、30代2名、40代1名である。二番目に、男性3名、女性1名と、男性の方が多くなってしまったが、片方の性別のみに偏ることがないようにした。三番目に、関西に居住している者が一名、東北に居住経験のある者が一名と、日本での居住地にも偏りがないように配慮した。そして、四番目に、各質問に対して、それぞれ性質の異なる回答をしている事例を選ぶこととした。例えば、質問に対して同質の回答を寄せた事例だけを集め、分析する方法もある。だが、本論文ではその手法は採用せず、日本の過去に対する朝鮮族の認識を「網羅的」に紹介することとした。なお、上記に留意して抽出した結果、延辺朝鮮族自治州出身者のみが抽出されたが、同自治州以外が出身地である被験者の語りは別の機会で紹介することとしたい。そして、技術的な問題であるが被験者の語りを紹介する際には常体表現を用いることにした。例えば、被験者の語りを引用する際には「～と思います」と答えた部分であっても「～と思う」と記している。

(1) A氏、40代前半、自営業(IT):表2の区分「26」

A氏は1970年代前半に延辺朝鮮族自治州の某市に生まれた男性である。小、中、高は民族学校を、大学は中国の民族大学を卒業、中国で企業に勤務した後、来日した。当初はアルバイトで肉体労働に従事したが、システム・エンジニアとして勤務するようになり、現在は自分で小規模ではあるが企業を経営するようになった。日本で高等教育を受けたことはないが、滞日期间である10年以上15年未満の全てをアルバイト、会社員、そして企業経営者として就労し続けてきた。

来日前

少し考えた後、「日本人の中にも悪いことをした人がいると考えている」と答えてくれた。A氏に大きな影響を与えたのは、学校教育と日本文化であった。小学校の授業で見た抗日映画が記憶に残っているのだが、その一方で同じく小学生の頃から映画を通して日本を知ることができたので、「悪い印象は持たなかった」のである。A氏が述べた日本文化とは1972年の日中国交回復以降に流入するようになった日本映画のことを意味している。具体的に、森村誠一原作のドラマ「人間の証明」や俳優の高倉健、「北国の春」や「少年隊」といった歌やアイドルまでもあげてくれたのである。

次に、筆者はA氏が両親、祖父母から日本の過去について聞いたことがなかったか質問した。A氏は、大学生の頃に、父から聞いた話を筆者に話してくれた。A氏の「一族と日本との関わりは深かった」。A氏は、父方の祖父の弟、つまり大叔父が、父に宛てた手紙を読んだことがあった。大学卒業後に進路を塞がれた父に対し、大叔父が自分の過去を話し、詫びたというのがその手紙の内容であったようだ。大叔父は満州国時代に満州国政府の学校で教師を務めた後に、日本の警察で働いていた。だが、満州国崩壊後には、共産党軍の軍人として国共内戦に参戦、長春の南方、四平における戦いでも大いに活躍したとのことであった。

しかしながら、1960年代以降の文化大革命期に満州国時代の対日協力の過去を問われ、大叔

父は失脚する。また、大叔父の過去は大叔父本人のみならず、その甥であるA氏の父にも影響を及ぼした。父は父親（A氏にとっては祖父に当たる）を5歳の時に亡くしていたので、大叔父に引き取られ育てられていた。父は成績が大変優秀で、大学卒業後にパイロットの道も開けていたのだが、急に取り消された。政治的な理由であると勘付いた父が大叔父に尋ねたところ、大叔父が父にその手紙を渡したのである。手紙には上記の経緯が書かれ、そして「『すまなかった』という言葉が書かれていた」とのことであった。

この話を聞いた筆者は、「日本や中国に対する反感や怒りが強まったのではないかとA氏に尋ねた。対してA氏は、「文革の時に苦しかったのは自分の一族だけではなかった」と答えてくれた。「金持ちだというだけで、あるいは韓国に親戚がいるというだけで、失脚したり、処罰を受けたりする朝鮮族は多かった」とのことであった。また、A氏にとって「大叔父の不運は遠い話でもある」とも話してくれた。なお、A氏は、「『政治は知っておくべきだが、関わるな』という大学時代の朝鮮族の先生の言葉をよく覚えている」ということであった。

来日後

「歴史認識について話したことも特になく、あまり考えたこともない」ということであった。ただし、A氏の家族に怪我を負わせたにも関わらず中途半端な謝罪しかなかった日本人の姿を見て、南京大虐殺の責任を認めない日本政府の態度を思いだしたこともあったとのことであった。A氏が、自身と日本人との関係を、日本の過去に関する議論と重ね合わせていることが窺えたのである。

また、A氏は日本の社会や文化について多くのことを感じていた。A氏は就学ビザで来日し日本語学校に通いながらも、肉体労働のアルバイトをしながら生計を支えたのである。「一日三時間しか寝る時間がなかった」とA氏は過去を振り返った。仕事を通じて知った日本社会の特徴について、「日本は実力主義ではないと思った」、「長い付き合いが重視される。日本人同士でがちりつながっていて、外国人が入っていくのは

容易ではないと感じた」、「中国では良いサービス、安い価格を提供する者が選ばれるのだが…」と話してくれたのである。ただし、その後に、「日本は中国に比べて『ごますり』や賄賂の文化が少ないと思う」と付け加えてくれた。

また、韓国と日本を比べて、韓国では差別を受けたことがあるが、日本では「少なくとも表面的には差別されたことはない」とも話してくれたのである。ただし、「中国、韓国では朝鮮族に対する差別がある。日本でも中国人に対する差別がある。どこの国でも結局少数者なのだから、政治・歴史には意見しないということなのだ」ともA氏は語ってくれた。この語りに朝鮮族としてのA氏の処世観が凝縮されていると考えた。

(2) B氏、30代前半、企業勤務(貿易)、表2の区分「19」

B氏は1970年代前半に延辺朝鮮族自治州の某市に生まれた女性である。小、中、高と民族学校を、中国で短大を卒業後、来日した。アルバイトを経て、現在企業に勤務している。キリスト教への入信、日本人との結婚、出産、子育て等、就労以外でも多くの生活上の変化を経験していた。

来日前

「日本人は過去残酷なことをした、許せないという思いを持っていた」とまず話してくれた。最も影響が大きかったのは学校教育で、小学校の頃に見た抗日映画が印象に残っているということであった。731部隊を題材にしたそれを見たときの感想を、「日本人は人間を動物のように扱う」と話してくれたのが印象的であった。その次に、同じく小学校の時に聞いた祖母の話も記憶に残っているということであった。植民地時代の頃、祖母姉妹は朝鮮半島に住んでいた。だが、曾祖父に連れられて豆満江を越えて満州にやってきたのである。曾祖父が、日本の軍人が、その当時20歳だった祖母と祖母の妹を見て、家に赤い丸をつけて帰っていくのを見て、娘達が日本軍の慰安婦にされると思ったからだそうである。B氏の家族は「朝鮮半島植民地支配と満州国支配という二重の抑圧」を受けていた。実態については諸説あるものの、731部隊と従軍慰安婦

という二つの非常に重い事件が、B氏の認識形成に影響を与えていたのである。だが、それでもB氏が来日を決意したのは、短大卒業後に父が渡日を勧めたからであった。

来日後

来日後、日本人に対しては謙虚で優しいと感じ、「それなのに、過去なぜあのようなことをしたのか」と考えるようになったそうである。さらに、来日して二年後に教会で洗礼を受け、クリスチャンとなってから「あのような支配、戦争、残虐行為も全て神が計画されたこと」と思うようになった。B氏は家族ぐるみで教会に通い、聖書の勉強会も主催するようになっていた。「キリスト教には相手の罪を赦すという教えがある。自分も日本の過去を赦そうと思った」と話してくれた。さらに、最近数年間は「テレビをゆっくり見る余裕」もでき、「日本が過去やったことは悪いが、日本人の中にもあの時代苦しんだ人がいるということが分かった」ということであった。

続いて、最後に「自分と同じように、ほとんどの朝鮮族は漢族や朝鮮半島のコリアンと同じような認識を持つことが難しい」と話してくれた。延辺にいた朝鮮族が、北京や上海等漢族の多い地域に行くとき自分が中国人として見られないことに気づくと例をあげてくれた。一方、韓国に行くと、今度は中国人として扱われるということも教えてくれた。移住を通じて自身のアイデンティティの悩みに直面し、漢族や韓国人の持っている日本の過去に対する考えに共感できなくなるという「難しい問題」をB氏は指摘してくれたのである。

なお、後日、筆者は、「朝鮮半島と中国はそれぞれ父と母のようなもので、どちらも大切な国」と答えた他の被験者の語りをB氏に伝えた。「とてもいい答えだと思う。そのように考える朝鮮族が他にもいてくれて嬉しい」というB氏の答えが印象的であった。

(3) C氏、30代前半、企業勤務(IT):表2の区分「17」

C氏は1980年代前半に延辺朝鮮族自治州の某市に生まれた男性である。小、中、高と民族学校を卒業後、日本の大学に入学した。その後、

IT(情報技術)に興味を持ち、専門学校に入学した。卒業後は、システム・エンジニアとして社会人生活を送り、滞日期間は10年以上15年未満に達した。社会人生活を送りながら、東アジア国際関係や朝鮮族に関連する各種催しに参加することもあり、問題意識の強さが窺えた。

来日前

「日本の帝国主義政策とそれを遂行した政治家は間違っていると考えているが、日本という国や日本人に対して、悪い認識を持ったことは決してなかった」とまずはっきり述べてくれた。くわしく経緯を述べて行くなれば、中国共産党が指定した「南京大虐殺に代表されるような日本人が中国人を虐殺する映画を毎年4、5本」見てきたことも事実であるが、ドラゴンボール、スラムダンクや宮崎駿のアニメに親しんできたので、「日本人がそこまで悪いことをするとは、とても思えなかった」と話してくれた。そして、「アヘン戦争以来、欧米列強も中国を侵略した。だが、中国人の民族意識が高まって来た時期に、日本が中国に対華21カ条要求をつきつけてしまったので、特に悪く思われているのではないか」とも話してくれた。

「学校生活の大部分を日本の漫画とゲームにはまって、過ごしてきたようなもの」とまでC氏は自身を喻えた。「鄧小平が改革開放を宣言して以降、80后(パーリンホウ:中国語で80年代生まれの意)、90后(チューリンホウ:同じく90年代生まれの意)と呼ばれる若者達は、自分と同じように幼い時から日本文化に接する機会があった」とC氏は語ってくれた。そして、C氏は高校在学中に日本留学を決意する。「歴史教科書で学んだ日本は本当の日本ではないと思ったが、中国では日本人に接する機会がなく、確かめることができなかった。それで、直接日本に行くことにした」とC氏は当時を振り返ってくれた。C氏の祖父母は、彼が幼いころに亡くなっていたので、日本の過去について聞いたことはなかったそうだ。歴史教科書で教わった日本と、アニメや漫画を通して知った日本との乖離が、C氏の日本に対する関心を喚起し、留学を決断させたと言える。

来日後

C氏はITに興味を持ち、専門学校に入学するために日本で通っていた大学を中退する。専門学校を卒業した後に、システム・エンジニアとして働き始めるようになった。来日以前からアニメや漫画に代表される日本文化に強い関心を持っていたC氏であるが、来日後には、それらを通じて、日本、中国、そして韓国がより関係を深めることが必要であると考えようになった。C氏の日本人に対する印象がよかった契機が、東日本大震災であった。「日本人の国民性が評価された」、「自然災害がもたらした否定的な面のみならず肯定的な面もある必要がある。日本人、中国人、韓国人、もう一度原点に戻って互いに仲よくすることができる」と述べてくれたのである。

ただし、C氏は日本に来て驚いたこととして、在日コリアン（C氏は「僑胞」と呼んでいた）の存在をあげてくれた。C氏は、来日後から関西圏の各地に定住していた。「自分が知っている在日コリアンは名前を日本式に変え、自分達の出身を隠していた。自分達のように韓国語を話すこともできず、不思議に思った」とC氏は述べた。筆者は、特に一昔前までは、在日コリアンが日本社会において生活しづらい状況にあったことを説明した。「日本で活躍する柳美里、姜尚中、伊集院静らが在日コリアン作家や、行定勲のGO、井筒和幸のパッチギを見て、在日コリアンの生活や葛藤について知ることができたと思う」とC氏は話した。だが、「自分は差別を直接経験したことは無いので、その痛みと苦しみは分からないだろう。ただ、朝鮮族や在米コリアンとは違うということは確かだと思う」とも付け加えてくれた。これは日本人である筆者に対するC氏の配慮ではないかと思えた。

また、C氏は日本人と歴史問題について話したことはないが、自分が朝鮮族だということを知った日本人から「中国と韓国が戦争になったらどうするのか」という質問を受けたことがあったと教えてくれた。C氏は「両国が戦争にならないよう、その前に全力を尽くしたい」と答えたそうである。C氏にとって、「中国も朝鮮半島も両方、

大事な国である」ということであった。筆者は、無神経な質問を受けたC氏に同情したが、C氏は「朝鮮族のことを知らないから、そのような質問をしたのだろう」と答えてくれた。

聴き取り調査全体を通じて、日本の過去も含めて、日本や日本人に対する非難の言葉をC氏から聞くことはなかった。たとえ、日本で苦勞したとしても、中国で学生時代に接した日本文化が、C氏の肯定的な日本の過去や日本に対する認識の形成に影響を与えているように思われた。

(4)D氏、20代前半、専門学校生:表2の区分「1」

D氏は1980年代後半に延辺朝鮮族自治州の某市に生まれた男性である。小、中、高と民族学校を卒業後、日本の専門学校に入学した。日本滞在期間は1年以上5年未満であるが、当初東北地方に在住しており、東日本大震災を経験していた。現在は関東に居住中である。

来日前

まず、日本の過去については「教科書で学んだことが全てであり、いい思いが持てるはずがなかった」ということであった。「嫌悪感を持った」とも答えてくれた。しかしながら、「歴史は歴史」として考えているとのことであった。小学校の頃、祖父母と共に、満州国時代に日本が建てた役所の前を通り過ぎたのだが、その時、祖父が「この地下には監獄があり、何人も殺された」と教えてくれたそうだった。ただし、「実感が湧かず、ただ不思議に感じた」とのことであった。

また、D氏は日本にいた親戚から日本について話を聞いていたので、「日本に対してあまり悪い印象を持たなかった」そうである。その親戚はシステム・エンジニアとして日本で既に10年以上働いていたのである。さらに、D氏は日本のドラマにも親しんでいた。木村拓哉が好きで、「HERO」等、彼が出演するドラマはほとんど見たとも語ってくれた。「今は、朝鮮族が日本にたくさん来ているので、日本や日本の過去についてよりよく知っている」と答えてくれた。D氏が日本行きを決断したもの、親戚の話とドラマを通じて、日本に興味・好感を持ったからであった。

来日後

「日本の過去に対する印象は変わらない。歴史は歴史、過去は過去」であったが、D氏の日本人に対する印象はよくなったとのことであった。実は、D氏は来当初、東北で日本語学校に通っていたのである。そこで、東日本大震災に遭遇したのだが、避難所で日本人が食べ物を分けてくれたとのことであった。「その時の親切には感謝している」とD氏は話してくれた。その後、東京に移り専門学校でIT（情報技術）の勉強を始めたが、東北と東京は「人や社会の雰囲気は大きく違う」ということであった。

5. 考察

(1) 質問1に関して

以上、4名の聞き取り内容を列挙した。各質問に関するそれぞれの回答をまとめておきたい。まず、質問1の「来日前の日本の過去に対する認識」に関しては、「日本人の中にも悪いことをした人がいると考えている（A氏）」、「日本人は過去、残酷なことをした（B氏）」、「帝国主義政策とそれを遂行した政治家は間違っていると思うが、日本や日本人を悪く思ったことは一度もない（C氏）」、「いい認識がもてるはずがない（D氏）」というように回答が分かれた。アンケート形式ではないので、認識の程度を「とても悪い」、「悪い」等といったように段階分けしてはいない。ただし、上記四つの回答においては、二番目と四番目のそれは「否定的」、一番目と三番目のそれは「やや否定的」と分けることができるだろう。そして、「否定的」と「やや否定的」とに分かれた契機としては、A氏、C氏ともに映画、あるいはアニメといった日本文化であった。日本の過去に対して「否定的」な認識を持っていたD氏は、日本文化と他者の語りに影響を受け、来日を決意していた。なお、本論文には紹介していないが、満州国時代を懐かしんでいた祖母の話や幼いころから聞いており「悪くは無いと思った」という「非否定」の語りも、数は

少ないが抽出されている（男性、20代前半、大学生：表2の区分「2」）。

続いて、それらの背景である学校教育、日本文化、他者の語りといった要素を確認しておきたい。一番目に学校教育を通じて、日本に対して肯定的な印象を持った被験者は一人もいなかった。これはある意味、当然のことかもしれない。ただ、より興味深いのは、学校教育の中でも小学校の頃の教科書学習、抗日映画等を通じて、日本の過去への認識を形成した例が多かったのである。中国の学校教育における日本の過去の位置付けを概観していくならば、50～70年代に抗日映画が相次いで製作され、95年からは江沢民政権の下、反日教育が強化されていった。本論文で紹介した被験者も歴史教科書や抗日映画について言及していた。1995年以降の反日教育強化の中で、当時初等、中等教育を受けた朝鮮族の日本の過去に対する認識はより悪化したとも考えられる。

だが、一方で、既に1970年代末から日本文化が流入するようになっていたことに留意する必要がある。1972年の日中共同声明から6年後の1978年に日中平和友好条約が締結されたが、同年には同条約の正式発効を記念して日本映画週間が開催された。日本映画ブームが1980年代前半まで続くことになり、高倉健、山口百恵等が中国でも知られるようになっていたのである⁽²⁹⁾。1980年代には映画のみならず、「鉄腕アトム（1980年）」、「おしん（1985年）」といったアニメ、テレビドラマも放映された。「おしん」は中国のみならず東南アジアも含め、多くの国で視聴者を引き付けた。70年代末から80年代にかけて流入した日本文化は勤勉、我慢といった日本人らしさや、不条理な環境と戦う主人公の姿を描いたものが多かった。そして、90年代に入ると青春や友情、愛情を主題としたドラマも流入した。この時期には木村拓哉、酒井法子等が知られるようになった。「機動戦士ガンダム」、「北斗の拳」、「ドラゴンボール」等のアニメが放映されたのも90年代である。2002年の

(29) 志敏「大平正芳内閣と中日関係(その三)―中日緊密化へのプロセス―」『経済学論集』Vol. 49 No. 4、2010年、17-40ページ、25-26ページ。

インターネット定額制の普及を契機としたネット時代の到来も、中国人が多様な日本文化に触れることを可能にした⁽³⁰⁾。このような、歴史認識形成に影響を与える要因である反日教育と日本文化の重なりあいは、本論文の被験者の回答からも確かにうかがうことができる。

さらに、朝鮮族の日本文化の受信について考えるならば、彼らには長期に亘る日本語教育の伝統がある。東北部に移住してきた一世は強制的とはいえ、満州国時代に日本語教育を受けた。二世、三世は中等教育課程において第二外国語として学んできた。ゆえに、日本文化にも関心を持ちやすく、それに対する理解も早いと考えられるのである⁽³¹⁾。加えて、現在多くの朝鮮族が日本に長期滞在している。前述のように在日朝鮮族数は約8万人と推定されている。中国の朝鮮族人口が約220万人なので、それらの約4%弱が長期滞在者ということになるのである。出身国と日本での自国民数の割合という観点から考えれば、中国人や朝鮮半島のコリアンよりも、自民族の知人を通じて日本の情報を得やすいと言えるのである。D氏の語りもこれを裏付けている。

(2) 質問2に関して

次に、質問2の「来日後の日本の過去に対する認識」に関しては、「あまり考えたことは無いが、自身の家族を怪我させたのに中途半端にしか謝らない日本人を見て、歴史問題に対する日本の態度を思いだした（A氏）」、「日本人の一般市民にもあの時代大変苦しんだ人がいることを知った（B氏）」、「中国、韓国、日本が文化を通じて絆を深める必要性を痛感した。また、在日コリアンの実態についても知った（C氏）」、「東日本大震災を契機に日本人に対する印象はよくなった（D氏）」というように分かれた。各被験者の日本での経験、居住地、滞在期間によってこれらはそれぞれ異なると考えられる。例え

ば、関西に在住していたC氏は在日コリアン差別の実態を知り、また東北に以前居住したことのあるD氏は震災を通じて、日本人の人間性に触れることができた。

さらに、日本人の一般市民も苦しんだことを知ったという事例、ならびに現在の日本人との関わりから日本の過去について考えたという事例も興味深い。前者は「再評価」、後者を「想起」として捉える事が出来るだろう。例えば、南京大虐殺を持ちだしたA氏の語りは、日本人との接触を通じて、被験者が中国で形成した日本の過去に対する認識を「想起」したと考えられるのである。

(3) アイデンティティとの関連

また、アイデンティティのゆれが、歴史認識に対するそれに連関したという被験者の語りは、朝鮮族独自の日本の過去に対する認識形成の一形態ではないかと筆者は考えた。他の被験者の中でも、歴史について考えると、自分のアイデンティティについて考え、そこでそのゆれを自覚すると答えたものは少なくなかった。アイデンティティのゆれに関する部分のみ抜粋するが、ここで他の被験者（女性、20代後半、表の「10」）の語りをあげたい。

「日本と韓国の間で起きたいろいろな戦争について韓国人が何か感じて、中国朝鮮族であって韓国人でない自分たちは、韓国人と全く同じようには感じないのである。中国人に対してもそれは言える。自分自身、小さい頃から、所属感について悩んだ。自分の住んでいた場所は漢族が多い地域だったので、それにも関わらず民族学校に通う自分は彼らとは違うと当然のように思っていた。」

「中学時代の終わりに、朝鮮族の間で、韓国の歌やアイドルが人気になったが、彼らが民族は同じでも自分達とは違うということに気付いた。大学に入ってから、本を読んだりして、

(30) 祝方悦「中国の若者における日本ポピュラー文化の受容—アニメ・ファンの受容態度からの考察—」『市大社会学』（12）、2011年、45・63ページ、48～49ページ。

(31) ただし、1985年以降生まれの朝鮮族は、中等教育において日本語より英語を第二外国語として学んでいる者が多い（男性、20代後半、社会人（製造業）：表2の区分「15」からの聞き取りより）。

自分の価値観を形作っていったが、小学から中学にかけて考えてきたことが、より確かなものとなった。中国人、そしてコリアンを二重否定するということである。日本に来てからも、中国、コリアン、そして朝鮮族を客観視できるので、ますますその思いが強まった。だから、日本の過去について考えるときは、まず中国人とコリアンの二重否定から入ってしまうのである。」

このような語りは朝鮮族が持つアイデンティティのゆれが、歴史認識に影響を与えた例だと言える。

おわりに

本論文では、在日朝鮮族の日本の過去（1910～45）に対する認識の聴き取り調査を行った。現時点での結論を述べる。まず、来日前においては「残酷なことをした」といった「否定」と、「日本人があそこまで悪かったとは思えない」という「やや否定」、そして「非否定」とに分かれたと考える。これら認識の形成に影響を与えたのは、学校教育、日本文化、他者の語りといった要因であった。続いて、来日後においては、日本人との人間関係如何によって、日本の過去を思い出す「想起」や、日本の過去を捉えなおす「再評価」が観察された。

このような結果を基に今後の課題をあげるならば、朝鮮族が日本の過去を認識する際の独自性を検証する作業が必要となる。この独自性は、中国人や朝鮮半島のコリアンと比較した場合にあげることができるもので、三点あると思われる。一番目に、日本語教育である。朝鮮族の移住一世から三世まで日本語は初等、中等教育において正規課程であった。二番目に、日本定住者の多さである。中国の朝鮮族数が約220万人と言われている中で、約8万人が日本に定住していることの意味は大きい。これら二点は、朝鮮族の日本の情報についてのアクセスを容易にする。

三番目に、アイデンティティと歴史認識の関連である。自分が、中国人か、コリアンなのか

分らないというアイデンティティの悩みは朝鮮族にとって大きな問題であり、それが歴史認識に如何なる影響を及ぼすのかを分析しなければならない。中国人や、朝鮮半島のマジョリティは、ほとんどこのような悩みは経験していないと考える。そして、付け加えになるが、研究手法に関するものとして40代から60代までの被験者の獲得に注力したい。世代毎に、日本語教育の程度、日本文化の受容度、アイデンティティの揺れの振幅は異なると思われ、それらを時系列的に検証する必要があるからである。

冒頭でも述べたように、日本の過去を巡る議論は依然として日本、中国、朝鮮半島において看過できない問題となっている。朝鮮族の移住二世、三世もこの問題の「当事者」であると同時に、上記にあげた独自性を持っていると考える。このような独自性を持つ朝鮮族の日本の過去に対する認識を研究することは、マジョリティのナショナリズムの影響を受けやすい日本、中国、朝鮮半島の歴史認識に少数民族の視点を加えることに繋がり、大きな意義を有すると考えるのである。